文学的文章　主題の捉え方

嫁入り道具が、日増しに揃って行った。

姉が一時に大人びて映り、まぶしく見えることもあった。まぶしさが別離の日の悲しみや、父と共々この家に取り残される淋しさに変わって、激しく胸を打たれる日もあった。

ある日曜日の午後であったと思う、僕は姉と親戚へ行った。その帰り路に、姉が何気ない風に云った。

「節ちゃん、あたしが居なくなっても、さびしくない？」

「――――」

僕はだまっていた。

「お父様だって、お困りになるわね」

しばらく間を置いて、姉は思い切ったように、言葉をつづけた。

「あたし、節ちゃんに相談があるの。――鵠沼の、桂おばさま、ね、知ってるでしょう？」

「知ってるよ」

突然のことで、姉が何を云おうとするのか、僕には分からなかった。桂おばさまというのは、死んだ母の遠縁に当たる、母より三つ四つ若い、美しい人であった。（中略）

「桂さんに、――あたしの代わりに、家へ来ていただいたらと思ったの。お父様に話したら、節雄が好ければ、っておっしゃるのよ」

ドキンとした。みんな、自分を可愛がってくれる人は行ってしまって、お体裁に、代わりの人を置いてゆこうとしている。――そんな気もした。

①「僕、嫌だ」

そういえば、桂さんはこの頃、二、三度家へ遊びに来ている。自分には何も云わず、みんなでそんな事を進行させていたに違いない、――そんな風にも想像した。

「このこと、あんまり突然だから、あなたには呑み込めないかも知れないけど、あたしがお嫁に行ってしまったら、お父様だって随分お困りになるし……」

「お父様は、勝手に旅行してればいいさ」

②僕はすげなく云い切った。姉は淋しそうに、そのまま黙った。

（永井龍男「胡桃割り」講談社　による）

主題の読み取り

作者が文章を通じて表現しようとしている中心的な内容を主題という。

物語の主題を捉えるには、次の点に注目するとよい。

・人物を通して描かれる価値観や考え、人物の心情の変化や成長。
・出来事の展開、各場面における人物の行動。
・作品の状況設定、時代背景。

例題

本文で描かれている「僕」の心情を、本文の流れに沿って並べ替えなさい。

ア 自分の周囲の人間が、自分の知らないところで話を進めていたことに反感をおぼえた。

イ 姉との別れがくることを悲しく思い、自分が家に取り残されてしまうことへのさびしさにおそわれた。

ウ 自分を可愛がってくれる人が、体裁だけ取り繕って、みないなくなってしまうのではないかと感じた。

［　　→　　→　　］

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「そういえば……遊びに来ている」とあるが、ここで「僕」は何を考えているのか。適当なものを選びなさい。

ア 桂さんが、自分の母の遠縁に当たる親類だったということを思い起こしている。

イ 姉の代わりに、桂さんに自分の家に来てもらうべきかどうか決めかねている。

ウ みんなが自分のいないところで桂さんを家にむかえる話を進めていたのではないかと考えている。

［　　］

(2) ——線②「僕はすげなく云い切った」とあるが、このときの「僕」の様子を正しく述べたものを選びなさい。

ア 父が困るとは思えず、桂さんが来る必要はないのではないかと考えをめぐらせている。

イ 突然のことで事態を受け入れることができず、どうすればよいかと途方に暮れている。

ウ 姉が居なくなる悲しさもあり、自分を置いて話が進んでいたことに反発し冷淡な態度をとっている。

［　　］